

イワクラ探索記録

「諏訪の七石」超歴史研究会 皆神隆

諏訪大社には、上社と下社があり、上社に本宮と前宮、下社に春宮と秋宮が置かれており、60余の境内、境外の摂末社がある。上社と下社は諏訪湖をはさんで鎮座しており、全



下社秋宮神楽殿

ての社の四隅に自然木の柱を立て、この中を最も清浄な神地としている

が、この柱は申・寅の年、つまり七年ごとに建て替えられる。それが有名な「御柱祭」である。本社は古来、諏訪大明神、諏訪南宮大明神、諏訪南宮正一位法性大明神などと称されたという。全国に一万社を超える分社が奉斎されており、幅広い崇敬が寄せられている。

今回、改めて諏訪大社を訪れることとなったきっかけは、諏訪七石と呼ばれる石が存在すること、磐座信仰の存在がみられることを知ったことによる。『諏訪上社物忌答』などには七石として、上社境内や郡内にある巨石などが挙げられており、自然石が多く、磐座信仰とも深く関係して信仰対象となっているという。諏訪七石とは、以下の石であるが、現在では場所が確定できないものもあるという。

- 御座石(ごさいし)
- 茅野市 御座石神社拝殿前 杵石(くつし)
- 諏訪大社上社本宮一の柱奥 硯石(すずりいし)
- 諏訪大社上社本宮拝殿山側 蛙石(かえるいし)
- 諸説あり、現存場所確定困難
- 小袋石(おふくろいし)
- 茅野市宮川高部 児(小)玉石(こだまいし)
- 諏訪市湯の脇 児玉石神社 亀石(かめいし)
- 諸説あり、現存場所確定困難
- ※諏訪市博物館HPより
- <http://www.city.suwa.nagano.jp/scm/>
- <http://www.city.suwa.nagano.jp/scm/ku/sai/>

下諏訪駅に降り立った我々は、まず下社秋宮を指した。祭神は、建御名方神、八坂刀売神の他人重事代主神を配祀する。巨大な注連縄が目目を惹く神楽殿の後ろに幣拝殿があり、拝殿の左右に一、二之御柱が立てら



下社秋宮一之御柱

れており、本殿の裏側に三、四之御柱が立てられている。当日は、この後ここで婚礼が行われており、華や

かであった。

旧中仙道を北へ進むと、御作田神社があり、その先に中仙道の五十五



下社春宮

里塚跡の石碑が道路沿いにひっそりと佇んでいた。この先に「矢除石」があるということであったが、発見することができなかった。

やがて、下社春宮に到着した。祭神は秋宮と同じ、構造も秋宮と全く同じであり、御柱も同様に立てられていたが、秋宮と比較して参拝客も少なく、静かな境内であった。西側に流れる砥川にある中州の林のなかには、浮島神社があり、さらにその

奥には、「万治の石仏」が存在する。伝説によると、春宮に石の大鳥居をつくる時、この石を材料にしようとしてノミを入れたところ傷口から血が流れ出したので、石工達は恐れをなして仕事をやめた。その夜石工の夢枕に上原山に良い石材があると告げられ果たしてそこに良材をみつけるこ



万治の石仏

とができ、鳥居は完成した。石工達はこの石に阿弥陀如来を祀って記念としたという。

下諏訪駅に戻った我々は、電車で上諏訪駅へ移動し、駅前観光案内所にて今夜の宿を確保した。次のコ



旧御射山神社

ースはどうするか。検討のため昼食とした。駅の近くで店を探し、適当なところへ入る。諏訪といえは、諏訪湖のわかさぎであろう。わかさぎ定食を注文する。ふと見ると、地ビールがあるではないか。「諏訪浪漫・りんどう」と「諏訪浪漫・しらかば」を味見してみた。かなりいける。

その後バスで霧ヶ峰へ移動。神社巡りから高原ハイキングへとシーンは、がらりと変化する。ちょうどニッコウキスゲが美しく咲き乱れ、都会の喧騒を忘れてのんびりと風景を楽しむ。というわけにはいかないのが超歴史研である。帰りのバスに乗

り遅れると大変なことになる。早足で高原を突き抜け、目指す旧御射山（みさやま）神社に到着した。小さな祠が残されているだけであるが、この付近は御射山遺跡とされ、平安時代から鎌倉室町と経て元禄時代まで続いたという、下社の御射山祭御狩神事が行われたところである。騎射等の技を競って諏訪明神に奉納し



児玉石神社

た際のスタンドの跡が今も土壇として残されている。ヒュッテ御射山にしては休憩、搾り立ての牛乳を堪能した。飛ばしてきたので時間に余

裕ができた。八島ヶ原湿原を少し散策し、バス停に着くが、まだ時間があつた。近くのロッジにてソフトクリームを食べた。バスを待つと、帰りが空いたタクシーが来たので乗る。宿の近くの児玉石神社まで行った。鳥居の後、社殿の前に鎮座するのが諏訪七石のひとつ、「児玉石」である。ここには他にも幾つかの石があるが、大きなものは合計4個である。児玉石には直径15cm程の穴が空いており、中には水が溜まっていた。今



上社本宮

日は殆ど曇りの天気であつたが、こ

のとき突然夕陽が差し込み、児玉石を明るく照らし出した。これは、6時ごろの写真である。児玉石が我々を歓迎してくれたように感じ、気持ち良く本日の調査を完了した。この後夜に入った「諏訪浪漫」などの地酒の買出しをして宿へ、例によって反省会が実施された。



硯石

祭神は建御名方社とは大きく異なる。幣拝殿に向かって右側の脇片拝殿の後ろにあるのが「硯石」である。かつては、四脚門から硯石をのぞむ方向が信仰の主軸線であつたといわれ

ている。その線の背後には神体山である守屋山が鎮座しており、その山頂には磐座と小祠がある。磐座信仰があつたことを物語る伝承である。上社本宮には、このほかに一の柱の奥に「杓石」があり、これは建御名方神の到着のあとを留めた霊石であるという。



小袋石

上社本宮の神体山である守屋山に磐座信仰の痕跡が残されている。そうと判れば、当然ながら守屋山へ行かねばなるまい。もちろん行くのであるが、そのまえにまだ見なければ



上社前宮

ばならない石がある。「小袋石」である。小袋石は別名「舟つなぎ石」と呼ばれ、高さ12.3m、横7.8mというおむすび形の巨石であり、茅野市高部、磯並社の奥の山中にある。その別名からも伺えるが、太古諏訪湖の水がここまであつたと考えられるという。守屋山の山麓、茅野市高部には筆頭神官である神長官、守矢家があり、神聖な地域となっており、小袋石は、最重要祭場のひとつだつたという。この場所は判りにくく、探すのに一苦労であつた。しかし、ここでまた不思議なことに、石に近づいたときに太陽の光が射す

という現象が再び起こった。曇っているのは暗くて写真を撮るのも難しい場所であるが、突然の明るい太陽光線に、そして歓迎してくれた石に感謝した。小袋石の手前にも小祠がある(これは磯並社ではない。磯並社は山の入口付近にある)。

さて、もうひとつ、上社前宮へ参拝する。祭神は八坂刀売神である。前宮は斜面にあり、本殿が奥の高い位置に鎮座している。もちろんその後には神体山である守屋山がある。古くから「水眼(すいが)」と呼ばれる清流が、前宮の神域を流れる御手洗川となり、神水として大切にされているという。

これにて諏訪大社の四社に参拝を完了し、守屋山登山の準備が整った。弁当を買出しして登山口で下車すると、あとはひたすら登るだけである。標高1650mであるが、登山口は1000m程度であろうか。それほど標高差ではない。登山客にも何人か出会った。一気に登りつめた山頂には、まさしく磐座と小祠があった。ここでは雨乞いの神事がよく行われるというが、その時に祠

に小便をかけたたり谷に落ちたりすると守屋大臣が怒ってたちまちにして雨を降らせる、と伝えられている。現在では、それを防ぐために鉄の柵が設けられているものである。守屋神社奥宮と書かれた石碑の裏側には、祭神、物部守屋大連大神とある。曇り空であるが、雲は高く、諏訪湖が望めた。これも御神徳というものに



守屋神社奥宮

に違いない。

昼食を済ませ(もちろん山頂ビール付き)、しばし風景を楽しんだ後、また一気に下山した我々は、タクシ

で尖石縄文考古館を目指した。こゝは、前回訪れた折には改装のために閉館中であり、見学できなかった。途中、御座石神社があり、タクシーの運転手に話を聞いたが、どうやら神社の位置が動かされており、現在そのような石は無いとのことであった。時間も無いので先を急ぎ、尖石縄文考古館を見学した。「縄文のビーナス」、「仮面土偶」などを鑑賞した。グッズも購入できて各自満足し、ついでにまたソフトクリームも賞味して、完璧なリベンジが果たした。復元した縄文住居、そしてもちろん、「尖石」を見た。

尖石遺跡は、八ヶ岳西麓、標高約1100mのなだらかな尾根上にある約五千年前の縄文中期の集落跡で、百五十近い住居跡が発見された特別史跡である。大地を少し下った急な南斜面にあるが、安山岩の「尖石」である。この岩には石斧などを研いだ後があり、砥石であったようであるが、遺跡の名前はここの石にちなんでつけられた。尖石の近くの棚畑遺跡で発見された妊娠した女性の姿の

土偶は、「縄文のビーナス」と名付けられ、1995年、縄文時代のものとしては初めて国宝に指定され、最古の国宝となった。

その後、先程のタクシーで入手した情報により、歩いて15分程のところにある「縄文の湯」で温泉を堪能してしまった。これはまた充実した調査になってしまった。茅野の駅前「養老乃滝」で電車を待つ間に反省会を実施し、帰途へ着いたのであった。



尖石

参考文献

：神社辞典 白井永二、土岐昌訓(編)

東京堂出版  
… 諏訪大社の御柱と年中行事宮坂  
光昭 著 郷土出版社

# イワクラ学会会報